

家さ 帰ろうよう——人生の終末期を迎えて

私は近く九十五歳。妻は私より五歳下の九十歳、腰骨の手術で殆ど寝たきり状態。移動には、私が車椅子を押して、食堂などへ伴う。

この年の改まった頃、川崎市南部の新興都市にある「老人ホーム」へ夫婦して入居した。今朝も、午前八時頃車椅子を押して食堂へ行き、我れ先にと空席を見付けて席に付き、膳部が運ばれるのを待つのである。

当初、この大食堂への蝟集の様には圧倒された。形容は悪いが、それは飼葉桶に集まる家畜の如く、従って、おのおのの食し方も、それら動物の口の動きに似てしまう様に見えるのだった。慣れれば、何のこともない。

食堂は一階、道路に面してい、その間は、細長い庭になっている。そこには様々な草や木が植えられていて、珍種のものもある。例えば「山法師」という木、私は生れて初めて見たものの一つだが、秋、白い満月を思わせる花をつける、逞ましい常緑樹。それから庭の北隅に「ジューン・ベリー」と

いう、原産地不明の木は、これを書いてある四月頃見事な、これも真ッ白な白い花だが、日本産の梨の花をもっと盛大にしたものを咲かせる。今、この花の下に、あのう、すい、紫を滲ませた赤い花を付ける山つつじが咲き、下草の緑と合わせて絶妙な空間を演じている。

私はその空間を、*「ほう」*と見つめ乍ら、実は心深くは楽しまないのだ。

食事風景の中で、白く乾いた風がふつと流れる。——家さ 帰ろうよう——と、幼い時から折ふし漏れ出る淡い思いが掠すめる。

そしていつの頃だったか、次のような詩みたいなものを作ったことがある。

家さ 帰ろうよう

母は、体の弱い兄を氣遣って、外出する時は私を連れ出すのだ。

はじめのうちにはもの珍しく私ははい、いだものだが、しばらくすると、——家さ 帰ろうよう——とごねだすのだ。

用事が済むまでは帰れねえ!!

暮れかかる人家のない原っぱで

そこだけが、白くぼーっとかすんだところ——地藏様が二基並らんでいる。

地藏様の近くは わが家だ。

小学校は隣り村、休憩時間の講堂で

四つ違いの姉さに

——家さ 帰ろうよう——

授業が済むまでは帰れねえ!!

それとも、一人で帰れるか?

家には、父トさも母カさも 兄アさ姉アさ それに 三つ違いの妹もいる——。

世界大恐慌が、我が家を東京へ押し流した。『田舎っぺい』は外へ出られない。

おまけに、トンボも、セミも、あの夕暮れのホタルも いないのだ。

学校? それは、頭痛、腹痛、歯痛と、知恵の及ぶ限りの サボタージュ!!

こうして低空飛行の学校の横滑り……

さらには、上官の命令は朕チの命令という軍隊で、——家さ 帰ろうよう——の独り言!!

その間に、家は焼け野原!!

長兄は、大陸戦線（徐州作戦）で負傷!!

次兄は、フィリピン・レイテ島、カンキポット山の尾根道で、米軍の十字放火で二十三歳の命を散らした。

原爆投下!! ポツダム宣言受諾!!

厚木航空隊、何を血迷ったか?

わが軍、降伏すれど、航空隊降伏せず、参集せよ!! のピラを撒くが、参集は0!!

軍上層はトラックで重要物資疎開?

われら兵士は、下着数枚に、軍服・作業着各一着ずつ……

超満員列車で、故郷の疎開地へ!!

三日もせずに、父は私を専門学校数学科へ、臨時試験に狩り立て、二人して上京。

試験はお情け合格だったが、故郷に着いたその夜、父は無念の他界!! 過労であつたらう、その

無念を思いやる暇もあらばこそ——。稼がねばならぬ。手取り早くだ!!

こうして元海軍下士官兵は、一夜にして闇屋稼業!! 超満員の夜汽車の中での、ライト下での読

書も乙なもの!! ——家さ 帰ろうよう——などとは言つた覚えがない。

私は、いま、「老人ホーム」での生活を語らねばならぬだろう。

「ホーム」の食事はおいしいし、従業員はやさしく、親切だ。しかし従業員にお構いなしに、入居者

はどんどん変化する。目立つのは、脚、腰の不如意。当初は普通に歩いていた人が杖ステッキになったな、と思つたら、間なくして車椅子を両足で押す移動、次にはわが妻のように、後ろから介添えが必要となる。人間、それ程に脚、腰が弱いのか？といふかれる。

次に目立つのは顔の表情。当初は、この人は元氣旺盛、迂闊に近づくと思つた人が、今は、顔色も冴えなく、深く思い悩む、と言つた風情の人も少なくなはない。

光陰矢の如しとは、斯くの如きか、次には私の番ではある。

「ホーム」には、そうした身体不如意の人は少くない。中でも重症の人は、大食堂とは別の部屋での介護付き食事となる。そこを覗くと淋しく暗いなあ、と感じるのは私の偏見か？

いや、そうでもないのだ、と近頃、私は思うに至つた。と言うのは、大食堂のそれは、私のようなひそかな思いを別にすれば、和やかで、笑いを混えた会話も少くない。と言うのは、おどけたパフォーマーと言つた風情の人が結構いるもので、彼ら彼女らは、大げさな物真似やら、突拍子もない会話で、人を笑わせたりして座を賑わすのだ。聞けば、元遊芸集団に所属していたなどの人もいるが、殆どは普通の素人で、座持ち芸で自らも楽しんでる人が殆どだ。ところが、ところがである。

この数ヶ月、コロナウイルスのパンデミックで、「ホーム」側が食堂の配置を、一人一机、机と机の間隔を広くした結果、会話も途絶え、従つてパフォーマーの出る余地が無くなったのだ。今では静かな食事と、そそくさと自室へ戻つたあとの空漠のみが残る。距離の近さが、半ばは自発的だが、氣質の近い人のグループづくりが、おのずと、パフォーマーを生み出すのだ、と私は感じる。

別室の食事風景の暗さも、それと関係がないとは言えまい。

そして、このことと、直接の関係はないのだが、このことに觸発された、私のある思いを、私は述べてみたいのだ。それはフランスの哲学者ミシェル・フーコーの『監獄の誕生』からの思い付きである。(ここでは仔細なことは省く)。フーコーは一九六八年五月にパリで起った学生運動(パリ革命)に連動して、西洋における刑罰制度の歴史を積極的な主題として扱うようになる。

刑罰は、およそ十八世紀末までは、洋の東西を問わず、身体刑であった。ところが、西洋で十八世紀末に監獄へと処罰様式が変化する。この変化を彼は「君主権力」から「規律権力」への移行と位置づける。つまり前者は犯罪によって損なわれた君主権を、修復する儀式。後者は、彼らを注意深く「躰ける」規律権力なのである。そしてそれは他の制度のモデルとして役立つ「パノプティコン」と呼ばれる建築様式によって、それが可能となる、と言われる。

これはイギリスの有名な哲学者ベンサムの考案によるものだが、中央の中心に監視用の塔、周囲に円環状の建物、その各室に受刑者の居室という構造——塔からは全居室を見ることが可能だが、居室から塔内を見ることが不可能。かくて、受刑者は常時、監視下に置かれて意識せざるを得ず、権力の側は、見られずに見ることが出来、それによって受刑者を「躰ける」ことを、可能にするのである。これを別様に表現すれば、受刑者を管理、監視し、「客体化」し、その者の異常性、逸脱、危険性、病などの特徴を「知る」ことが出来るようになる。このことは、「権力」が留保される場合のみ「知」は発達しようとする古くからの先人見を覆す。こうして古くからの「君主権力」が「規律権力」に取って替わる。

更に、このことは、必ずしも「監獄の成功」とは言えず、犯罪率を減少させることや、再犯防止に役立っている訳ではない。しかし、自由を与えたり、逆に拘束を強化すべきであったりの、有用化と無力化の対策を選別し得ることを可能にするのである。いみじくもフーコーは、このことを、この権力のメカニズムが、魂を産出し、そこに個人を閉じこめる、と言っている。

「パノプティコン」、恐るべし。なぜなら、西洋のみか、今や世界全体に「パノプティコン」は、様々な建築様式に、目的に応じた変形を加え乍ら蔓延していることは、誰しも承知しているだろう。例えば学校、病院、工場、その他、例えば、私が蟄居する「老人ホーム」はどうか？ 「ホーム」では、中心に監視塔などの立派な設備を設けなくとも、今日では従業員個々にアイフォンなどの機器があり、個室の鍵は従業員にとつて無用のものだ。彼らは自在に居室に出入りする。つまり入居者の「客体化」や「知識化」は容易だ。

かと言って、それなしに、高齢化し、容態の変化が著しい入居者を介護、見守ることは困難だろうことは、容易に察しられる。

多くの入居者は、そんなことを気につけないのか？ 屈託のない様子だが……。ふとしたことから——家さ 帰ろうよう——などと幼児退行癖の強い者には、気がかりなことだ。常時、監視下にある。そう考えただけで、私は不快!! 落ちつきを失うのだ。

けれども……。

居室者の「客体化」「知識化」を必要と考えれば容易に「パノプティコン」化できよう。もう一歩進めて考えれば、入居者の健康管理が切実な問題である限り、それは必至のことでもあろう。そのた

めに、多くの従業員を擁し、必要な器機を持たせてもいるのである。

私の「ホーム」には多くの同居者がいる。彼ら、彼女らはそれをどう考えているのやら、何ら屈託が無いようでもある。私自身は、そのことだけでなく、あれや、これやを考えると、乾いた、冷たい風が、ふつと流れるのを意識する。

「往きて還らぬ道の一里塚が、ここなのだ」を胸にしながら、もくもくと、ただもくもくと食卓に座す——。そして少年の時から、あの思いが——家さ 帰ろうよう——。家には父トさも母カさも——。この幼児退行!! 私という人間の弱さ——。しかし、まあ、九十歳を超えて生きているとは、故郷もなく、旧居もなく、車椅子の妻と二人……。その妻との会話すら不可能、私の耳は全聾の役立たず……。

私は、いつかは判らぬその日まで、黙って耐えるしかあるまい。往生するとはどんなことなのか? 「存在」に還る、その「存在」とは何なのか? 考えれば判らぬことばかり、考えねば、木石と化すること、と単純に言えるのだろうか?

(二〇二〇・四・二〇)